志摩総合病院

osy

志摩総合病院

死んだ後の身体というのはこうも冷たいものだったのか。
あまりに冷たすぎて怖くなった。

「嘘…だよね？」

彼は、ただ眠っているだけに見えた。
とても静かに眠っている。

「目を覚ましてよ…だってさ、おととい、メールしたよね…？」

（”ユン。僕、君と出会えてすごく幸せだよ”）

「僕…気持ちを伝えきれていなかったのかな」

（”君といるとすごく安心する”）

「返事も、読んだよ」

（”不安が消えてしまうんだ”）

（”カンナが僕に教えてくれたことがあるんだ。大切な人と一緒にいる時間を沢山作ることが大事だって。僕、あまり街に出歩かないから今のところユンしか知り合いがいないけどもっと沢山の友達を作って、飲み会とか、カラオケとか行きたいなぁ”）

（”カンナと、ユンと、僕と…あとは君のボードのメンバーの誰かひとり、誘って遊びに行かない？オーギーさんは多分のらないよね。ミレイユが、女の子で唯一友達なんだけど”）

（”もし気が乗ったら返事をください。まる。”）

「神様…」

（”ユン、君が大好きだ。友達としてね！”）

「僕から奪わないで…」

（”ちょっと酔ったかも？…ユダより”）

「奪わないでください…お願いします……」

（”追伸”）

（”なんだよ、この幸福のメールって！（笑）　僕、七人も友達がいないからだるくなると思うなあ”）

「ワイワイ、今日こそしっかりユンを起すんだぞ…大好きなハムを、ドッグフードにトッピングしてあげるから…」

「…それでも、目を覚まさなかったら……」

幸福のメールを君に送りかえしたなら、戻ってきてくれるだろうか。

「…そしたら、…帰ろうか……。書き残しているメールがあるんだ…」

今なら理解してあげられるだろう。
彼女が、こんな気持ちでずっと過ごしてきたんだということを。

「送ってあげたら…きっと、喜んでくれるよね？」

こんなに苦しいなら、一緒に死んだほうがましだと思える程苦しかった。

「…ペンダントは、僕が預かるね」

ユンがかけている首元のチェーンを外しながら、額を合わせた。
もう生きてはいないことを、冷たい身体が教えてくれる。
この冷たさは一生記憶から消えないだろう。
涙が目元から注ぎ足し、注ぎ足し溢れ、ユンの安らかな表情を濡らした。

「…こんなことなら、僕…きみより、早く死にたかった…！」

「消えないで…僕のことをひとりにしないでよ、ユン―――…どうしてだよ！！」

僕には、きみが必要だったのに。